

男宮たちは御とのごもりたり、略下

〔空穂物語藏開上〕女御きみなかのおとゝにわたり給てみ奉り給て、いたくぞおもやせ給にける。うへのさばかりうしろめたがりきこえ給ものをとて、み奉り給に、略中 御ぞはあからかなるあやのうちぎの御ぞ、ひとかさね奉りて、御けうそくにをしかりておはす。

〔西宮記〕一天皇元服略中

御調度事中略御脇息一

〔西宮記臨時九〕親王元服

延喜十七年克明親王加冠、略中 其儀、卷西廂簾、其北障子南面設冠親王座、用土敷二枚、并表席

天慶二年八月十四日、吏部記云、章明親王加元服、略中 西二刻置市櫛具、二階、唐匣、櫛篋、盃、冠篋、及脇篋等、

〔源氏物語若紫〕これみつばかり御ともにて、のぞきたまへば、源たゝこのにしおもてにしも、ち

ぶつすへたてまつりて、をこなふあま成けり、すだれすこしあげて、はなたてまつるめり、中のはしらによりゐて、けうそくのうへに經ををきて、いとなやましげによりゐたるあま君、たゝ人ともみえず、四十あまりばかりにて、いとしろくあてにやせたれど、つらつきふくらかに、まみのほどかみのうつくしげにそがれたるすゑも、中々ながきよりもこよなういまめかしきものかなと、哀にみ給ふ。

〔源氏物語末摘花〕御なをしなど奉るをみいだし、すこしさいいで、かたはらふしたまへる、か

しらつき、こぼれいでたる程、いとめでたし、おひなをりをみいでたらんときとおぼされて、かうしひきあけ給へり、いとおかしかりしものごりに、あげもはてたまはで、けふそくををしよせて、うちかけて、御びんぐきのしどけなきをつくるひ給。

〔榮花物語十臺〕火舎にくろぼうをたかせ給へり、花水のぐやなどあり、これは供養法の御座なる